

『発心集』と『方丈記』との関連小考

——『発心集』第五九話・第六〇話を中心として——

藤 本 徳 明

はじめに

私は、別稿において、「我が分に過ぎぬれば望む心なし——『発心集』の思想について」^{注1}と題し、『発心集』巻五の、特に、第五九話、第六〇話を、主として、内容面や思想上の立場から検討し、『発心集』の特質についての試論を提起した。紙幅の関係で、ここでは述べえなかつた、両話に関する、主に表現面からの検討を、それも、『方丈記』と対比しつつ本稿では行い、両稿をあわせて、巻五の、主として、五九話、六〇話の意義を明らかにしたいと考えている。また、それを通じて、『方丈記』作者長明と、『発心集』との関連についての、私なりの見通しを、部分的になりと立ててみたい、というのが、もう一つの目的である。

そこで、次に、築瀬一雄氏編の『鴨長明全集』本に従って、五九話と六〇話との原文をかかげ、必要と思われる箇所^註に解説を施し、上述の目的に添っての、考察をすすめることとする。

この両話、とりわけ六〇話については、後述するように、すでに『方丈記』との関連があることは、多くの人から指摘されているが、その類似を、逐条的に検討したものは管見に及んでいないので、こうした試みにも、一応の意義はあると考え、ここに小考を記してみた次第である。

注1 「説話物語論集」第三号——『発心集』特集——所載。なお、本論は、

論の性格上、右の論考と内容に一部重複するところがある。

注2 本稿で『発心集』の底本としたものは、築瀬一雄氏編『鴨長明全集』所

載の、慶安四年片仮名交り整版本である。ただし、この『鴨長明全集』本は、本文の傍に、神宮文庫本をもって校合してあるが、本稿では、印刷の都合上、その校合は原則として省略した。しかし、本論で問題とする傍線箇所に限って、両本の間、相当の意味の違いが見られる時にのみ、本文の該当箇所の右に、、を付し、その箇所が神宮文庫本では（、）内のように記されている旨を、（イ）として表記した。次の例のごとくである。

例 必ず、（イはかなからず）皆これ我が身のうへに有り。

また、『方丈記』の底本としたものは、築瀬一雄氏訳注「角川文庫」本『方丈記』（大福光寺本にもとづく校本）である。なお、文中で、単に五九話としたときは、前記『発心集』中の説話番号による第五九話を指すものとし、括弧をつけて、たとえば「二〇」のように示したときは、前記『方丈記』の章節番号第二〇の章節を指すものとする。

本 文

（五九）乞児物語事

或上人の物へまかりける道に、乞児三人計ゆきつれたりけるが、おのが友物語するをきけば、独りが云ふ様、「あふみはゆゝしき運者かな。さかのまじらひしていまだ三年にだにみたぬに、宝鐸ゆりたるは有難き事ぞかし。」と云へば、今一人が云はく、「其は別の果報の人ぞ。口きたなくて云ふべからず」と云ふ。「是をきよてこそ、我がさまを仏菩薩の事にふれてはかなく見給ふらん事おもひしられて、哀にはづかしくおぼえ侍りしか。」と語りき。

又或人かたるなかに生きて、いやしき家にやどをかりてとまりけるに、此の家の主を見れば、年八十余にやあらん、頭は雪の如くして膚はくろくしはたゞみ、目たゞれ口すけうて、腰は、二重にかゞまりて立居る度に大きくなるしういかにも今日明日の事にこそと、いとほしく覚えて、是をすゝめて云ふ様、「なんぢ老せまりて、残命今いくばくかはあらん。行歩もかなはざれば、人にまじはるにつけても苦しからん。今は出家うちして、念仏申して、のどかにゐたれかし。さらば後世のたのしみも然る可きのみにあらず、身もやすからん。」と云ふ。翁のいふ様、「誠に今はさやうにこそ仕るべきを、成るべきつかさのつ侍るによりて、たへぬ身に老の力をはげみて、かくまでつかへ侍るなり。我よりも今三年がこのかみなる翁上臈にて侍り。かれ人まね仕りなむ後は、必ず其のつかさに罷り成るべければ、それまでまち侍るなり。」と云ひける。①さやうの者の成るつかさ思ふに、さばかりこそはあるらめ。其の事に執をとめて、今や〜とまぼりをりけん、罪ふかく（イナシ）哀にこそ侍れ。但し是らを打ちきけば、愚なるやうなれど、能く思へば、此の世の望高きもいやしきも道同じ。我らがいみじく思ひならはせる司位も、是を上づかたにならぶれば、翁が望にことならず。況や天竺震旦の国王大臣のありさまなどは、喩へても云ふべからず。

又或人云はく、「治承の比、世の中みだれて、人おほく亡びうせ侍りし時、かたきの方の人を捕へて頸をきりに出でまかるとて、のゝしりあへるを見れば、ことよろしき者にこそ、さすがに由ありて見ゆるを、情なくゆゝしげにして、おひたち行く。地獄絵にかける鬼人にことならず。あな心憂、よも現心あらじと哀にいとほしく見ゆる程に、道に藪あるをふまじとて、よぎて行かんとするを、見る人なみだ落して云はく、『かばかりの目をみて、今いく時あるべき身なれば、藪をふまじと思ふらん。』とはかなく悲みあへり。」

是又、人の上かは。我ら世のすゑに及びて命みじかく果報つたなき

時、わづかに人界に生れたりといへども、二仏の間やみふかく、闘靜堅固のおそれはなはだし。ひま行く駒はやくうつり、羊の歩屠所にちかづけば、をはり今日とも知らず、明日ともしらす。何の他念かは有るべき。立ちても居ても煩惱のあだの為に繫縛せられたる事を悲しみ、寝ても覚めても無常のつるぎの忽ちに命をたゞむ事おそるべきぞかし。然るを、むなしく塵灰となるべき限の身と思ふとて、露のまの貴賤をうれへ、心をなやまし、名利をわしる。只かの藪をよぎけむ人とこそ覚え侍れ。

②大方ひを虫（イ蜂蟻）の朝に生れて夕に死ぬる習も、必ず（イはかなからず）皆これ我が身のうへに有り。天の中に命みじかき四天王天をきけば、此の世の五十年を以て一日一夜とせり。我が国の命ながしと云ふ人、わづかに此の天の一日二日にこそはあたるらめ。況や上さまの天にくらぶれば、只時のまと云ふべし。かゝればとて、いづこかは我等がひを虫を思へるにことなる。

諸の事此の如くいはい、とてもかくても有りぬべき此の世なり。只彼の「夢の中の有無は有無とも無なり。まどひの前の是非は是非とも非なり。」といへるが、目出度きことわりにて侍るなり。されば禅仁と云ふ三井寺の名僧の法印になりたりける時、人よるこびいひたりけるかへり事は、「彼の六欲四禅の王位に見えたる所なり。此の小国辺鄙の位なんぞ愛するにたらん。」とこそいひたりけれ。智慧は猶かしこきもの也。大方凡夫の習、いやしくつたなき事も身のうへをば知らず。此の故に乞食かたる名聞をぐせり。目出度く止事無きことゝても又我が分に過ぎぬれば、望む心なし。民の王宮をねがはざるが如し。今これを思ひとくには、③濁れる末の世の人極樂をねがはぬはきはめたることわり也。彼の国のありさま衆生の樂、事につけ物にふれて、なにかは我等が分になすらへたる。みな心もことばも及ばぬ事どもぞかし。然あれば若し悲願をきゝて信をもおこし、④聊かのぞむ心もあらむ人は、此の世一つの事にあらず、生々世々につとめたりける

余波として、いかにも近づける事と(イナシ)、たのもしく思ふべきなり。

(六〇) 貧男好差図事

近き世の事にや、④年はたかくて貧しくわりなき男有りけり。司などあるものなりけれど、出でつかふるたつきもなし。さすがにふるめかしき心にて、奇しきふるまひなどは思ひよらず。世執なきにもあらねば、又かしらおろさんと思ふ心もなかりけり。④常には居所も無くて、古き堂のやぶれたるにぞ舍りたりける。つくくと年月おくる間に、朝夕するわざとは、人に紙ほんぐなど乞ひあつめ、いくらも差図をかきて、家作るべきあらましをす。寝殿はしかく、門はなにかとなど、是を思ひはからひつゝ、尽きせぬ荒増に心をなぐさみて過しければ、見聞く人はいみじき事のためしになん云ひける。

誠に有るまじき事をたくみたるははかなけれど、能々思へば、⑤此の世の樂には心をなぐさむるにしかず。一二町を作りみてたる家とても是をいしと思ひならはせる、人めこそあれ、誠には我身のおきふす所は一二間に過ぎず。⑥その外は皆したしきうとき人の居所の為、もしは野山にすむべき牛馬のれうをさへ作りおくにはあらずや。⑦かくよしなき事に身をわづらはし、心をくるしめて、百千年あらんために材木をえらび、檜皮かはらを玉鏡とみがき立て、何のせんかは有る。ぬしの命あだなれば住む事ひさしからず。或は他人の栖となり、或は風にやぶれ、雨に朽ちぬ。況や一度火事出できぬ時、年月のいとなみ⑧片時の間に雲烟となりぬるをや(イナシ)。しかあるを、彼の男が有増の家は、走りもとめ作りみがく煩もなし。雨風にも破れず、火災の恐もなし。⑨なす所はわづかに一紙なれど、心をやどすに不足なし。竜樹菩薩の給ひける事あり、「富メリトイヘドモ願フ心ヤマネバ、貧シキ人トス。貧シケレドモ求ムル事ナケレバ、富メリトス。」と侍り、書写の聖かきとめたる辞に、⑩「臂ヲカマメテ枕トス。樂其ノ中ニアリ。何ニヨリテ更ニ浮雲ノ榮耀ヲトメン。」と侍り。又或物には、⑪「

唐に一人の琴の師有り。緒なき琴をまぢかく置きて、しばしも傍を放たず。人あやしみて故を問ひければ、「われ琴をみるに、その曲心にうかべり。其のゆゑにをなじけれども(イ緒は無けれども)、心をなぐさむる事は弾するに異ならず。」となん云ひける。」かれば、中々目の前につくりいとなむ人は、よそ目こそ、あなゆゝしと見ゆれど、心には猶たらぬ事おほからん。彼の面影栖ことにふれて徳おほかるべし。但し、⑫此の事世間のいとなみにならぶる時は、かしこげなれど能く思ひとくには、天上の樂なほ終あり。つぼのうちのすみか、いと必ならず。況やよしなく有増にむなく一期をつくさんよりも、ねがはゞ必ず得つべき安養世界の快樂不退なる宮殿樓閣を望めかし。はかなかりける希望なるべし。(イナシ)

解説

① ここでは、田舎の翁の、官位への執着を、哀れんでいる。同様の発想は、『方丈記』(一二)にも見える。「官・位に思ひをかけ、主君のかげを頼むほどの人は、一日なりともとく移ろはんとはげみ、時を失ひ、世に余されて、期する所なきものは、愁へながら止まりをり」とする所である。『方丈記』は、福原遷都に際しての都の貴族のことであり、『発心集』では、片田舎の翁のことであるという違いはあっても、官位への執着を否定する視点においては共通しているといえる。なお、『方丈記』(二七)(以下『方丈記』とことわるのを略す)でも、自らの出家に際して、「身に官祿あらず。何に付けてか、執を留めん」と、同様の発想を示していることにも注目しておきたい。

② この五九の説話全体が、六〇話と共に、漸層法的・比較法的思考で貫かれていることについては、別の論文でも述べたし、今成元昭氏にも同様の指摘がある。^{注1}そして、『方丈記』にも、その種の思考が特徴的に存在することは、永積安明氏や築瀬一雄氏^{注2}によってつとに言及されていることである。一例をあげれば、『一六』で、飢饉の様を概

説的に述べたあと、「一七」で具体的に詳述し、「一八」で、焦点を夫婦↓親子↓乳児とその母へとしばってゆき、「一九」で、死体の描写へと結んでいるあたりが、典型的なものである。『方丈記』の中心テーマともいえるべき、長明自身の住居の大きさについて、④長明の最初の家↓⑤次の家↓⑥方丈の庵という変化を、「二六」で、⑦は⑧の「十分が一なり」とし、「二八」で、⑨は⑩の「百分が一に及ばず」としている所など、数学的とさえ言える、明確な比較表現である。そして、この②の部分でも、⑪ひを虫↓⑫命みじかき人↓⑬命ながき人↓⑭命みじかき天↓⑮上さまの天という、整然とした比較の体系が両構成されていることは、一見して明らかである。ここにも、我々は、書の発想法の類似を見てとることができる。

③「濁れる末の世の人」以下「思ふべきなり」までは、前世の因縁によって、浄土を望み、仏道に励む心の強弱が生ずることを強調している。この発想は、『方丈記』の末尾「三六」の、「汝、姿は聖人にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところは僅かに周利槃特が行ひにだに及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから悩ますか」としている部分と、思想的に共通するものを有している。自力にも、他力にも徹し得ず、宿命論的な理解に一筋の手がかりを求めようとする、この辺の発想は、しばしば問題となる「不請の阿弥陀仏、兩三遍申してやみぬ」のあたりを考えるのにも、示唆的なものがありそうである。^{注4}

④この、六〇話は、全体として、先述したように、つとに『方丈記』との関連が指摘されている所であるが、主人公の姿自体に、長明を思わせる所が多いと言えよう。長明もまた、「年はたかくて貧しく」、賀茂の社や和歌所といった、広い意味では「司などあるもの」だった^{注5}が、周知のごとく、「出でつかふるたつきもな」い地下人であった。「ふるめかしき心にて、奇しきふるまひなどは思ひもよらず」、当世風の、要領のいい世渡りは不得手なたちであった。とはいえ、「世執

なきにもあらねば、又かしらおろさんと思ふ心もなかりけり」。長明は、出家はしたかも知れないが、出家道に徹したわけではないことは『方丈記』、『発心集』、『無名抄』の著作自体が物語るところである。「常には居所も無くて、古き堂のやぶれたるにぞ舎りたりける」とあるのは、「三二」の、「おほかた、この所に住みはじめし時は、あからさまと思ひしかども」「仮の庵も、やや故郷となりて、軒に朽葉深く、土居に苔むせり」とある所を連想させる。

△住居の文学Vとも言える『方丈記』に対し、△住居の説話Vとも言うべき本説話が、『発心集』に存することは、両書の関連の深さを裏書きするものであろう。

⑤「心をなぐさむ」という文言は「三一」の、「勝地は主なければ心を慰むるに障りなし」という箇所に出てくる。が、「此の世の樂」を「心をなぐさむる」ことに置く唯心論的発想が、最も典型的に表現されている所は「三四」の「それ、三界は、ただ心一つなり。心、もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿・樓閣も望みなし」としている所で、「宮殿・樓閣」という△住居Vが、「心のなぐさ」みの比較対象として言及されていることも、本話と関わって注目される所である。

⑥他「人」のため「牛馬」のため、居所をいとなむ世のならいを述べている所として、「三二」の「世の人の栖を造るならひ、必ずしも事の為にせず。或は妻子・眷属の為に造り、或は親昵・朋友の為に造る。或は主君・師匠および財宝・牛馬の為にさへ、これを造る」とある所は、ことはなほだ類似している。

⑦他者のすみかのために、「身をわづらはし心をくるしめ」ること無常の原理にもとづいて、戒めるこの箇所は、その思想においてもまた対句や反語法を多用した文体においても、「三」の、「仮の宿り誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と栖と無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて、花残れ

り。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しほみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし」とある所と似通っている。

⑧家が火事で焼亡することを、「五」では、「一夜のうちに、塵灰となりき」としている。「一夜」と「片時」、「塵灰」と「雲烟」は、対句のように照応していると思われる。なお、「塵灰」という語を、五九話にも「むなしく塵灰となるべき限の身」と、はかない人身のたとえとして用いていることも、両書の発想の関連性を暗示している。

⑨ここで、空想の家について述べて、「わづかに一紙なれど、心をやどすに不足なし」とし、「三三」では、方丈の庵について述べて、「ほど狭しといへども、夜臥す床あり、昼居る座あり。一身を宿すに不足なし」としているのは、文言まで酷似している。思想的には、唐木順三氏の言う、「欲望を極微にした上での榮華、有を無に極限まで近づけた上での贅沢」としての「方丈の榮華」の発想において共通しており、その点で『発心集』は『方丈記』の延長線上にあるともいえるだろう。

⑩この書写の聖の語なるものは、『鴨長明全集』本における築瀬氏の注によれば、『天台霞標』第二編卷之三の「性空上人閑居偈」と同文の由である。これと相似た文言として、『論語』述而第七にも「子曰。飯疏食飲水曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴。於我如浮雲」という語句が存する。それと関連ありと、つとに、『方丈記評説』によって推定されているものとして、流布本『方丈記』に、次のような章段がある。(角川文庫で四二頁の「三三三」*「おほかた、世をのがれ、身を捨てしより、恨みもなく、恐れるなし。命は天運にまかせ、惜まず、いとはず。身は浮雲になすらへて、頼まず、まだしとせず。一期の楽しみは、うたたねの枕の上にはまり、生涯の望は、をり／＼の美景に残れり」。この章段が、長明の筆になったものか否かについては諸説があるが、築瀬氏が、「一つの推測」として、(長明

自身の)「別案であったのではないか」とされている説に従えば、『発心集』のこの箇所と、『方丈記』——長明との関連は、いよいよ深いものと見なされよう。なお、この「浮雲」という語については、『方丈記流水抄』は、『維摩経』に典拠を求めており、周知のように『維摩経』と『方丈記』の思想的連関には深いものがある。また、『浮雲』の語には「ありとしある人は、みな浮雲の思ひをなせり」「三三」という用例もある。

⑪『発心集』序には、「天竺震旦の伝へ聞くは、遠ければ、かかず」とあるが、この項は、中国の話ではあっても、「仏教説話の根幹をなすべき一々の説話」とはことなっている。序文に抵触するものではないが、「発心集にもより存したものと、築瀬氏は推定されている。私も、この説に賛同するものだが、注目したいのは、そのように、序でのべた原則と抵触する危険まで犯して、こういう中国の故事をひかずにいられなかった編者の心理である。我々は、ここで、当然、『方丈記』中に、長明が、「かたはらに、琴・琵琶おの／＼一張を立つ。いはゆるをり琴・つぎ琵琶これなり」「二九」とし、また「余興あれば、しば／＼松の韻に秋風樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。芸はこれ拙なけれども、人の耳を喜ばしめんとにはあらず。独り調べ、独り詠じて、みづから情を養ふばかりなり」「三〇」としている章段を想起するのである。草庵で独りひいて、「情を養ふ」音楽への現実的愛は、「曲」を「心にうかべ」て、「心をなぐさむる」、より精神的な境地へと発展していると見るべきであり、⑨で指摘したように、『発心集』中に、『方丈記』の境地をさらに展開したものが存することがここでも、看取されうるのである。そして、そうした音楽への愛は、「道にふける心ざしのせつなる」あまり、禁断の秘曲を演奏した、周知の『文机談』が伝えている事件を招来した長明の心理にも、関連するものと見られよう。

⑩この部分の解釈については、別稿でも述べたが、「世間のいとなみ」と、精神的快樂としての「差図」とを対比して、後者を「かしこげ」としつつも、それも所詮「よしなく」、それに「一期をつくさん」ことを否定、畢竟は、「安養世界の快樂不退なる宮殿樓閣を望むべきであるという、漸層法的な構造をとっていると言える。『方丈記』の構造も、はじめの大半を費して、「世間のいとなみ」を否定し、次いで、「それ三界はたゞ心一なり」〔三四〕という見地のものと、精神的快樂としての「閑居の気味」〔三四〕を説くが、しかし、「草庵を愛し」、「閑寂に着する」ことも、「とが」であり「障り」であって、つまりは「要なき楽しみ」であり、それを「述べて」、「あたり時を過ぐさん」ことをも否定し〔以上三五〕、結局「不請の阿弥陀仏、再三遍申して、やむ」〔三六〕とここで結んでいる、同様の漸層法的なものである。世間の快樂よりも、精神的快樂、さらに、それよりも、宗教（的快樂）の世界へという発想の構造において、両者の末尾部が深い共通性を有していることは否みがないところである。

なお、最後に、「はかなかりける希望なるべし」とむすんでいることをどう理解するかは、むずかしい問題であるが、私は、この文言に細野哲雄氏校註『方丈記』の、末尾部分註に引用された長明の思考様式についての指摘を想起させられる。すなわち「久松潜一氏は、以下の結びの部分に、今まで述べてきたことを自省し、これを否定して、そのはかなさを感じてゐる点のあることを指摘し、この態度は無名抄（一〇）せみのをがはの事、一二不可立歌仙之由教訓事等）にも見られるものであり、論理的な思考に、急に新しく感情的な思考が加へられてくるといふ所に、長明の著しい特色があると説いてゐる（『鴨長明小見』）」という指摘である。私は、この「はかなかりける希望なるべし」というのは、それまで述べてきた宗教的境地礼讃を、にわかには白けた表情で見つめ直したものであり、先の久松氏の指摘にあった『無名抄』一〇の結びの、「但あはれ無益の事かな」に照応するも

のを持っていると思うのである。

三木紀人氏は、長明を論じたその好論の中で、^{注9}長明には、「人間關係における一種の高所恐怖のようなもの」があった、とされたが、それを援用して言えば、長明には、思想に關しても、その種の「高所恐怖」のようなものがあったのではないか。それが、彼をして、たどりついた悟達の高みから、日常の低さへと、みずからを転落させるような、こういう結びを付加せざるをえなかった、深層的原因であったのではないか、とも考えたいのである。

久保田淳氏も、長明には「高揚から失墜への精神状態のパターン」^{注10}がある、とされているが、この表現も、そんな長明の個性の刻印された思考様式であった、とも理解されるべきものではないだろうか。

いずれにせよ、私は、この、蛇足とも見える結びの一言に、かえって、長明の個性を、鮮烈にうかがうる思いをもつものなのである。^{注11}

注1 「現実の家よりは差図の家、差図の家よりは極楽浄土と、漸層法によつて菩提心を発させる説経話」〔蓮胤方丈記の論〕・「文学」昭四九・二

注2 「漸層的な進行を示す手法でもって叙述している」〔方丈記について〕・「中世文学の成立」

注3 「漸層的であり、しかも求心的な叙述を展開している」〔方丈記全注釈〕〔一八〕の項）

なお、本稿に「一例」として示したものは、築瀬氏の指摘に従った。

注4 「不請の阿弥陀仏」については、山田昭全氏の「不請阿弥陀仏」私見」〔『古典の諸相』〕が、最も新しくかつ行届いた解説たりえていよう。

注5 管見に入ったものでも、築瀬一雄氏「鴨長明の新研究」中の「発心集研究序説」や、富倉徳次郎氏「方丈記詳解」中の「附録」などの古典的業績から、新しくは、前掲今成氏の論や、中野孝次氏「不安と救済——発心集」〔『国文学』昭四八・九〕に及ぶまで、同様の指摘は多い。特に、小林智昭氏の「方丈記と徒然草」〔『講座日本文学』5〕では五九話・六〇話中の（無常の論は）「『方丈記』のそれと構造的に緊密な一体観を呈す

る」とされているのは、本稿の主旨に関して、示唆的な指摘である。

注6 『中世の文学』中の「鴨長明」

注7 前掲『方丈記全注釈』

注8 前掲『発心集研究序説』

注9 「長明の出発とその後」(『国語と国文学』昭四八・四)

注10 座談会「長明と兼好」(『群像』昭四九・一一)

注11 この部分の本文批判の問題は、前掲拙稿で言及した。(『説話物語論集』

第三号)

むすび

以上、私は、『発心集』五九話、六〇話から、『方丈記』と、表現や発想において類似する点のある所を、一二箇所にとわって列挙し、私なりの解説を加えてみた。解説は必ずしも意を尽していないし、類似も、他に指摘すればできる箇所がありうるだろう。

しかし、それにしても、『発心集』の、その両話——とりわけ、六〇話が、量的にも、質的にも、『方丈記』と類似している度合いの大きいことは、具体的に明らかにされたいと思う。

これについては、前述したように、つとに先人の指摘があり、たとえば、西尾光一氏も、「文章が気恥かしいほど『方丈記』に似ており、『方丈記』により後人が増補したものかと思いたくなる位である」とされている。^{注2}

言われるように、後人の増補という可能性も絶無ではない。

しかし、単なる文体や語彙は、模倣することは困難ではないが、筆者の個性の深層に根ざす、発想や思想を共有した上で、文体や語彙を模倣することは、相当困難な作業であるように、私には思われる。そして、私見によれば、先にあげた一二箇所の類似点の大部分は、その種の模倣に困難な類似点であるように考えられる。したがって六〇話のごとき短い文章の中で、集中的に『方丈記』とそうした類似点を有す

る箇所を多く含めて執筆することのできた人は、『方丈記』の筆者その人に他なるまいとするのが、最も自然な推測といふべきであろう。実は、西尾氏も、前掲の指摘につづけて、「が、その試論的な発想や論旨の進め方は明らかに長明のものである」とされているのである。

私の、本稿における、くだくだしい所論が、そうした西尾氏の明快な論断や、築瀬氏や富倉氏などの先駆的な指摘に、いくらかでも、付加、補強するところがあつたとすれば、本稿執筆の目的は、足りたと考えている次第である。

なお、先の分析の結果が、大筋において誤まっていなければ、五九話、六〇話は、『発心集』研究の現段階にあつて、まだ必ずしも明らかにされてはいないところの、長明執筆にかかることの明らかな説話の、数少いひとつとなる、という意味をもちうるであろう。

そうした結果を手がかりとしつつ、『発心集』自体の原像や、『方丈記』や長明研究への、新たな展望をきり開くことは、今後の興味ある課題のひとつとなるものとも思われるのである。

注1 「解説」の項の注5

注2 『中世説話文学論』